

「大勸進 重源」特別展 に思うこと

(株)ジェクト 山村 賢治

(建築史学会員)

俊乗房重源（1121～1206）は、源平争乱の初期にあたる平安末期の治承4年（1180）、平重衡による南都仏教勢力攻略の際に焼失した、東大寺の鎌倉期再建の中心人物である。

重源上人坐像（国宝：東大寺蔵）の実物が見られる又とない機会であったので、奈良国立博物館で開催中の特別展を会期中の5月下旬に参観してきた。

会場中心に据えられた運慶作と伝えられる等身大の坐像は、鋭い眼光、への字に結んだ口元、両手で胸元の念珠をまさぐる最晩年の姿を活写したもので、重源の不屈の精神をよく表していて、見る者に思わず襟を正させる力強いものがある。



重源上人坐像（国宝）

重源像は他に阿弥陀寺（山口）、浄土寺（兵庫）、新大仏寺（三重）にも坐像が伝えられていて、今回3体とも展示されていたが、やはり東大寺蔵のものが最もリアルで実物に近いのではないかと感じられた。

これを期に、重源が東大寺再建にどのようにかかわってきたかを振り返ってみるのも意義あることと思ひ、筆をとった次第である。

重源上人

平家による焼討ちで灰燼に帰した南都仏教のうち、興福寺は氏寺であることから藤原氏の手でいち早く再建が始められることになったが、東大寺は再興の目途が全く立てることが出来ない状態であった。あけて養和元年（1181）朝廷は造東大寺長官に藤原行隆、大勸進職に重源を抜擢した。勸進職には当初法然が指名されたが、自身の布教活動に専念することを理由にこれを断って重源を推薦したとも、また一説では重源自ら願い出て、この困難な一大事業の推進役を買って出たとも言われる。このとき重源61歳、以後25年間85歳で入滅するまで、全身全霊をもって東大寺再建に邁進するのである。

重源は朝廷警護の武家紀氏の出とされ、13歳の時醍醐寺で出家した後各地の霊地で修業していたといわれるが、それまでの経歴は必ずしも明らかではなく、当時は高野山に止住する聖であった。しかし、重源は自ら入宋三度といい、なかでも南宋の阿育王寺舍利殿の修復に、日本から用材を送って再興に貢献し、さらにその他の寺院の建立にかかわったことからみても、当時このような大規模な建築工事を遂行できる技術、経験をもったものは、国内に彼以外には考えられず、大勸進職という立場でこの事業を進めるには最適任者であったということではできる。

用材調達

天平期における聖武天皇勅願の東大寺創建には、国費の大半を費やしその後の経済危機を招いたほどの大工事であったが、鎌倉期再興においても、後に幕府の援助があったとはいえ、当初は源平争乱の最中であり、戦後の混乱期にかけての事業であったため、資金と材料の調達に至難のことであった。重源は自らの勸進聖としての経験と組織力を活かし、独特の方法で募金活動（勸進）を展開する。全国七道に一輪車を帯同した同行衆を派遣し、大仏への結縁ということで、有力な地方豪族、社寺から一般大衆に至るまで、銭、米、木材、金属類など、この事業に必要なものは何でもその量を問わず募集して回ったのである。頼朝の追手を逃れて北陸路を行く義経一行が、安宅関で富樫氏に咎められるが、弁慶の機略で逃げおおせる場面が、歌舞伎十八番「勸進帳」で有名であるが、この時弁慶が読み上げる勸進帳がまさに東大寺再建のためのものであり、この事からもいろいろな人が、この募金活動に加わっていたことが知られる。

焼け落ちて山塊のような姿になっていた大仏を、宋人陳和卿らの協力を得ながら、螺髪1個から鑄造を始め、部分的に補修を重ねながらどうにか元の形に戻し、顔だけ金メッキを施して、後白川法皇の手で開眼供養の式を行うことができたのは文治元年（1185）のことであった。

大仏殿をはじめとする巨大建築も陳和卿ら宋人技術者の協力で進められることになったが、問題は材木の調達である。近畿周辺で良材を得ることが出来なかったが、朝廷から周防国（山口）を東大寺造営料国として賜り、重源自ら国司として管理を任されることになって、自由に伐採ができるようになった。文治2年（1186）自ら大工等を率いて現地（現在の徳地町）入りし、早速杣始めの儀式を行なって作業に取り掛かるが、山深い中国山地のあちこちに残っている良材を傷めないように切り出し、唯一の運搬路である佐波川まで引き出すには大変な労力と作業の工夫が必要とされるわけであるが、「勸進聖」として経験を積み、多くの人を束ねる組織能力や、一種の治外法権として、山で働く平氏の残党を源氏の追及から守り通せる包容力を持った重源にしてできることであった。

切り出した用材は、佐波川を使って河口の防府木津まで流下させるわけであるが、途中の浅い箇所に関を作って水深を確保したり、岸の岩や崖を削って川幅を広げたりして、長材の損傷をできるだけ少なくして下流へと引き下ろしてゆくのである。防府からは瀬戸内海を筏に組んだり船に取り付けたりして、海流や風を利用して搬送し、大阪湾からは川船に引かせたり、兩岸から人力での綱引きなどによって淀川、木津川を経て木津まで引き上げる。木津からは陸送で、台車・修羅を使い、百頭以上の牛に引かせたり、結縁を求める多くの人も参加しながら、奈良坂から東大寺境内に運び入れたのである。

重源はこれらの大事業を遂行するために、防府に阿弥陀寺を建てて前進基地としての周防別所、瀬戸内海の支援基地として浄土寺を建てて播磨別所、大坂には物流の中継基地として渡辺別所を設け、他にも備中、伊賀、高野山、東大寺に、合わせて七箇所の別所を設けたが、いずれにも共通して①方形の浄土堂、②本尊の丈六阿弥陀如来像、③舍利を納める金銅五輪塔、④鐘、⑤大湯屋が備わっている。また、重源には阿弥陀信仰と舍利信仰が基本にあり、自ら南無阿弥陀仏を名乗り、弟子達にも種々の阿弥陀号を名付け、日常生活において不断高唱念仏をとなえ、「念仏衆」として一体感をもって結ばれた信仰集団を、同時に事業推進集団として機能させたのである。

建築様式（大仏様）

現在の大仏殿は、戦国期に再び兵火により焼滅した後長く放置されていたのを江戸期（1706）に公慶らの尽力で建てられたもので、規模は創建時より桁行で四間小さくなっているが、重源は創建時と同規模のものを、それまでの構造的欠陥も改善した新しい工法によって建設することにした。「大仏様」とよばれるこの工法で現存するものは、東大寺南大門と浄土寺浄土堂（兵庫県小野市）がある。大仏様はその源流を宋様式に求めることは一応考えられるが、重源自身が考案した重源一代限りの様式であった。このような大工事を最も効率よく進めるために考えられることは、部材寸法・規格の統一であり、その種類をできるだけ少なくすることである。南大門は大岡実博士の「南都七大寺の研究」によれば、①柱18本（20%）、②斗2120個（9.3%）、③貫・肘木 計931丁（35.5%）、④虹梁 計14丁（6%）、⑤垂木 509丁（10%）のわずか5種類の断面・寸法の部材で全容積の約80%を占めており、建物の殆どができあがるという。この様式の特徴は、太い柱とそれを貫く挿肘木（貫を含めて）で基本的架構ができており、建築作業が非常に単純化されているということである。大工事で多数の工匠を寄せ集めており、これらを能率的に働かせるためにはこの方法しかなかったのであろう。重源の死後、この様式は急速に衰退し、二代目の大勧進職になった栄西が、禅宗様を始めるまでの過渡期に建てた東大寺鐘楼や、以後の大建築（東福寺三門、方広寺大仏殿、江戸期再建の東大寺大仏殿など）にこの構法が取り入れられ、また、従来の和様にも意匠が取り入れられて折衷様、もしくは新和様へと変化していくことはあっても、大仏様という独自の様式はなくなっていく運命にあったのである。

落慶供養

伽藍焼亡から15年後の建久6年（1195）大仏殿の再建なって落慶供養が執り行われることになり、源頼朝は、東大寺再興の大壇越として、また開設間もない鎌倉幕府の権威誇示のため、大軍を率いて上洛しこの儀式に参列した。

大和尚の号を得、75歳になっていた重源のその後の活躍は衰えることなく、大仏殿に続いて鎮守八幡宮、戒壇堂、南大門等を次々に造営し、完成した南大門には運慶・快慶の手になる金剛力士像も据えられ、建仁3年（1203）遂に東大寺総供養が、後鳥羽上皇を迎えて行なわれた。

重源は、残る東西の七重大塔造営のため、なおも活動を続けていたが、病を得て遂に建永4年（1206）86歳の生涯を閉じたのである。



東大寺南大門(1199)



浄土寺浄土堂(1192)



南大門架構・力士像



東大寺大仏殿(1706)



東大寺鐘楼(1210頃)